

ここは、

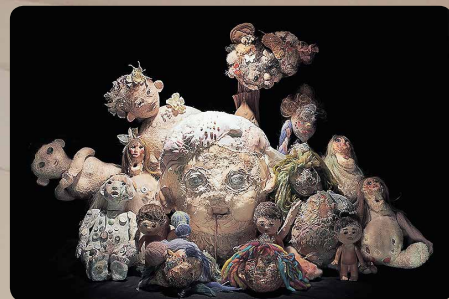
王国の入り口。

「とぜね」は「さみしい」、「かちやくちゃね」は「もどかしい」。林芙美子文学賞（北九州市主催）大賞を受賞した「とぜね、かちやくちゃね」は、強い切迫感を原初として編んだ。色覚障害の青年との出会い、血族の遺伝、母性と女性性、肉体と精神。葛藤と渴望を内在させて、物語は進む。

「衝動に駆られて書き始め、書きかけのまま放り出していったプロット。物語を現実から飛躍させて、フィクションとして完結させる決意をして書きました」

切迫感から生み出すのは、言葉と物語、そして人形だ。布や綿、紙粘土、ストッキングなどで皮膚を形づくり、糸と針で縫い込んでいく。例えば《おぼといとこたち》（2005年）。胴体や腕を放り投げるようにして座る3体は、欠けた肉体の生々しさと切実な精神の在り

処が未解決のまま、心に残る。《わたしたちの脚》（2012年）は、皮膚となった布地を糸で縫い込むことで覆いつくす。ヒステリックさを感じさせるほど執拗に続く行為は、祈るような、死にゆくような純粹な形として昇華する。「文章と人形、どちらも、元にあるのは世界と自分との隔たりにある強い初期衝動です。ある原初の衝動があつて、文章の場合は推敲を繰り返して枠組みだけ残し、より内面を伴うものとなるように言葉を取り除いていく。書き手と主人公が共有させることのないように、距離をつくることで書き終える。それに対して人形は、自分の肉を伴っているかのよう。生の状態に見えるものを原形として、縫う作業をしていくことで意味は削がれ、より表面的になっていく。決して分身ではないけれど、



作品撮影：オジモンカメラ

作家

工藤 千尋さん

【プロフィール】1981年秋田市生まれ。2005年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。在学中から人形をつくり、言葉を紡ぐ。「障がいのある人、ない人、アーティストが、核心の部分で相互に影響し合う場」である「ポコラート」を中心に出品。2015年ポコラート全国公募展審査員特別賞「中村政人賞」受賞。2017年岡本太郎現代芸術賞展入選、第3回林芙美子文学賞（北九州市主催）大賞受賞。受賞作「とぜね、かちやくちゃね」は「小説トリッパー」春号（朝日新聞出版）に掲載。秋田市在住

自分の弱い部分を補完してくれる存在として生まれました」

大学在学中に体調を崩した。苦しみあえいだ頃から続く造形と言葉を生む表現は、プライベートと地続きのものであり、それを突き放すものでもある。

「私は時間の流れがゆっくりなのか、表現に対してマッチョになれなかったことへのコンプレックスがある。でも、鋭い矢印を示すことだけが、表現ではない」

インスタレーション《王国の入り口（と、出口）》では、人形を非現実の王国の門番として位置付けた。葛藤と渴望の中で言葉を紡ぎ、縫うことで生まれた箱庭的な世界。ここはまだ、彼女の入り口である。

